

資料5 実践事例 B高等学校におけるケース会議開催の支援

(1) 基本情報の収集(ステップ0-①)

① コーディネーターの経歴

教職経験19年目。初任校で高等学校に赴任し、5年間勤務。2校目で特別支援学校高等部を10年経験し、B高等学校へ赴任。B高等学校4年目、特別支援教育コーディネーター3年目である。

② 学校の現状

生徒指導部の教育相談係内に特別支援教育コーディネーターが置かれている。現在、特別支援教育対象生徒として5名が挙げられている。発達障害などの診断の有無にかかわらず、支援が必要と思われる生徒に気付いた担任がコーディネーターに相談する流れが定着してきている。特別支援学校やハローワークなど外部機関とつながりを持ちながら、コーディネーターと担任で支援方法を相談し、その方針を学年主任に伝え、職員会議で全職員に伝達されるという流れができています。

(2) 支援の方針

コーディネーターの思いや願いを大切にしながら、校長や教頭、教職員の思いや願い、課題の背景にあるものに気付くような質問をしていく。思いや願いを理解し、相手の立場に立ったアプローチをしていくことで、学校全体に特別支援教育の理解が進み、協力者が増えていくと考える。必要な取組に対して、関係するキーマンや分掌に気付くようにし、校内の状況を整理しながら、組織的な体制を作り、高等学校コーディネーターが連絡調整役として動けるようにする。具体的な取組に対して、計画→実行→評価のサイクルを実施することで、取組の定着や維持、向上を目指していく。取組を繰り返す中で、支援を徐々に減らしていき、高等学校コーディネーターの自立を促す。教職員が組織内のそれぞれの立場で連携、協力していくことで、意欲と責任感をもって特別支援教育に取り組めるようになっていくと考える。

(3) 実践の経過

B高等学校での今までの取組を賞賛し、特別支援教育におけるさらなる思いや願いを聞き取ったところ、「みんなで支援していけるようになりたい」という答えを引き出すことができた。具体的な取組として、校内委員会とケース会議の開催が挙げられた。B高等学校においては、特別支援教育の学校全体の方針や年間計画を話し合う場を校内委員会、生徒の具体的な支援方法を考える場をケース会議ととらえ、支援を行っていくことになった。(ステップ1-②③)

① ケース会議 I への支援

ア ケース I の概要

対象生徒 C  
 2年生。1年次から名前は挙がっていたが、まじめでおとなしいため、大きな問題はなく過ごしてきた。1学期の成績で赤点が6教科出てしまった。保護者から「うちの子はなんとなく他の子とは違うのではないか」と訴えがあった。

イ 開催までの計画

B高等学校におけるケース会議 I の開催までの支援について、概要を表1に示す。

表1 ケース会議 I 開催までの実践の経過(一部)

※◇は特別支援学校コーディネーターの見解を示す

	特別支援学校コーディネーターの支援、伝えたこと	高等学校コーディネーターの発言、様子
取組への 気付き	【ステップ0～2】 ・現在の思いや課題を聞き取った。学校全体に特別支援教育が広がるためにはどんな取組が必要か、一緒に考えた。(ステップ1-支援②③)	・支援の必要な生徒について、職員みんなで配慮していきたい。特別な支援が必要な子に気付いて、気になっていても、みんなで「そこからどうしよう」とまではなかなか行かない。
	◇コーディネーターに実行力と実績があり、校内に特別支援教育の理解が進んでいるため、コーディネーターが他の教職員の思いや願いに目を向けながら進めていくことで、校内の支援体制を拡げていけると考えた。	◇困っているような表情で、解決策はないようだった。
	・先生方は、Cが今どのくらい困っているかとか、他の生徒とは違うところがあるとか、気付いているんでしょうか? ◇教職員が支援の必要性に気付くことができれば、支援体制も拡がっていくと考えた。	・はっきりとは気付いていないと思う。悪いことはしないし、少しぼーっとしているとか・・・赤点がたくさん出て会議で名前が挙がったけれど、そこからどう対応しようかまではいかない。
	・実態を分かってもらったり、みんなで支援を考えたりするにはどうしたらいいんですかね? ◇解決の糸口はみつかったが、具体的なイメージがなく自信がなさそうであった。ケース会議の具体的なメン	・出してもらおう?先生方に・・・出してもらって話し合えるといい。

組織作り	<p>バーや進め方を相談し、具体的なイメージをもてるようにすることが必要と考えた。</p> <p>【ステップ2】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>意見や考えが一番出やすい場所を質問し、効果的なケース会議を開くためのメンバーに気付けるようにした。(ステップ2-①)</li> <li>具体的なコーディネーターの考えるイメージができていいると思われ。メンバーの立場に立って考えることで、理解のためのアプローチしていく必要性に気付くと考えた。</li> <li>ケース会議の開催について、教職員に理解してもらう方法を一緒に考え、共通の認識や目標をもつことの大切さに気付けるようにする(ステップ2-⑤)</li> <li>ケース会議をすることで、どんなメリットがあるんですかね？生徒がどんな姿に、先生方がどんな姿になっていくのでしょうか？</li> <li>Aの学年の先生方もそう思っているのかな？</li> <li>理解のためにアプローチする必要性に気付けたため、さらに一人一人に合わせた対応を考えられるようにした。</li> <li>ケース会議の進め方や情報収集の仕方について資料を提供した。学年内の役割や職員の思いを質問しながら、それぞれの強みや望んでいることに気付けるようにした(ステップ2-④)</li> <li>ケース会議のキーマンに気付き、連絡調整をする気持ちが生まれた。さらに教職員の思いに目を向け、ケース会議に参加しやすい雰囲気を作るための方法を考える必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実際の指導については身近な学年会で話し合うのが現実的。その結果を教育相談の係で出したり、校内委員会で報告したりして、職員全体にも連絡する。</li> <li>校内の状況に思いを巡らせ、ひとつひとつ考えながら発言していた。</li> <li>支援の必要な生徒の困り感を減らす</li> <li>卒業後も見据えた支援をしていく</li> <li>先生方が実態を知り、生徒の困難さや支援の必要性に気付く</li> <li>何とかしなくちゃとは思っています。でも、そうですね。ちゃんとケース会議の意味や目的を伝えなければですね。</li> </ul> <p>《コーディネーターから見た教職員の姿 1》</p> <p>学年主任：特別支援のことはよく分からないから、私にお任せしますっていう部分が多くなってしま。でも、何とかしなくちゃと思ってると思う。</p> <p>担任：一人で取り組むのは負担が大きい。まずは先生方から情報を出してもらい、いろいろな先生方の感じ方や見方をお互い知るのが必要。</p> <p>教育相談係：前担任で、今までいろいろな対応をしたり、気にかけてたりしてくれている。</p> <p><b>学年主任と担任と教育相談係と調整してみます！</b></p>
実りあるケース会議に向けた計画立案	<p>【ステップ3】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>担任や関係する先生方の思いや困っている点に目を向け、生徒の実態把握やケース会議を効果的に行う方法を一緒に考えた(ステップ3-(2)計画-①)</li> <li>学年主任、忙しい中話し合う時間を確保してくださいましたね。生徒のことを考えてくれているんですね。</li> <li>みんなでかかわってくると分かれば担任の先生も勇気が出ますよね。</li> <li>連絡調整を行っていく中で、学年主任の強みに気付くことができた。初めての取組のため、他の教職員の理解や協力が得られるか不安そうであったので、思考を深め、解決方法を見付けられるような対話が必要と考えた。</li> <li>どうして黙っちゃうのかな？指導力がないっていう訳じゃないですよね？</li> <li>経験が少ないだけなんだ。じゃあいろいろ意見出してもらってよいということが分かれば大丈夫なのかな？</li> </ul>	<p>《コーディネーターから見た教職員の姿 2》</p> <p>学年主任：あれだけ赤点も取ったし、必要性を感じたのではないか。・・・面倒見がいいし、いろいろ考えがあるみたいだし。こちらから提案してほしいすれば、行動してくれると思う。</p> <p>担任：今後どうしたらいいか困っていると思う。保護者対応もあるし、担任の先生だけでは大変な部分もみんなでも助け合っていければ・・・</p> <p>学年職員：黙っちゃうのが怖い・・・考えがあっても、他のクラスのことだから、タッチできないっていう部分もあるし。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の指導もしっかりしている先生方ばかりです。・・・高校の先生は教科で動いていることが多いし、みんなで支援方法を話し合ったり、今までそういう経験がないのかも・・・</li> </ul> <p><b>学年主任に事前に話して、みんなで意見を出してほしいことを伝えておきます。ケース会議の初めにもそれを伝えて・・・教育相談係の先生はこの前話をしたから意見を出してくれると思う。</b></p>
考察	<p>コーディネーターの「職員みんなで」という願いを引き出し、ケース会議という形で特別支援教育に参画してもらうことに気付くことができた。学校の状況を整理し、効果的で教職員の負担が少なく行える場合は学年会ということになった。教職員の思いや願いに気付けるようなやりとりをしたことで、学年主任や教育相談係に連絡調整する必要性に気付く、アプローチをしていくきっかけが作れた。それぞれの教職員立場に立って考えられるような対話をしたことで、一人一人の役割を生かした効果的なケース会議にするための計画が立てられた。他の教職員に会議の趣旨を理解してもらったり、考えを調整したりすることが、活発に意見を出し合えるケース会議につながるということに気付くことができた。連絡調整していく中で、支援に携わる関係者を増やしていくことができた。</p> <p>【実践者がとらえたB高等学校におけるコーディネーターを取り巻く支援の広がり】</p>	

ウ 開催と実施後

協力要請があったため、高等学校コーディネーターをサポートする形でケース会議に参加した。

高等学校コーディネーターや教職員が中心となっていけるよう、なるべく静観をするよう心がけた。高等学校コーディネーターの進行は滞りなく、教職員の意見も活発に交わされた。(ステップ3-実行(2)-①)

実施後、成果をすぐにフィードバックしてモチベーションを高めるとともに、高等学校コーディネーターの気付きを引き出すため、メールでやりとりを行った。改めて訪問をし、高等学校コーディネーターが収集した教職員の感想や支援の様子、変容について聞き取り、よかった点は賞賛し、次のケース会議の課題を引き出した。(ステップ3-(2)評価-①)

<p>【メールでのやりとり】</p> <p>○ <b>特別支援学校コーディネーターから高等学校コーディネーターへ</b> 司会、完璧でした！先生方をつなぐ本当の意味のコーディネーターという感じでした。先生方もよい雰囲気でしたね。これが続けば、特別支援学校は専門的な部分のアドバイスをすればよいだけになると思いますよ。</p> <p>○ <b>高等学校コーディネーターより返信</b> 2学年の先生方は話したり、情報を共有したりする場が今まででなかっただけなのではないかということに気がきました。それぞれがあれだけよく見て、いろいろ思うところがあるのだから、すりあわせさえできれば、具体的な支援に行けます。場を提供できたという点で、かなりの収穫です。まずは、学年主任と担任を巻き込み、保護者へのアプローチを試みたいところです。</p>
<p>【実施後の訪問より】</p> <p>○ <b>高等学校コーディネーターが行った教職員からの聞き取り</b> ・今までだと考えがあってもなかなか言えなくて黙ってしまったが、話しやすくなった。学年の風通しがよくなった。 ・学年の理科担当職員から「気をつけてみます」と声をかけられた。配慮をしてくれていて、Cの好きな恐竜の単元では一生懸命やっているというよい情報も入ってくるようになった。</p> <p>○ <b>高等学校コーディネーターの気付きと評価</b> ・場を設定したことがよかった。きちんと支援していかなければと先生方は改めて思えたようである。 ・たくさん実態が出て、先生方もよく見てくれることが分かったので、今回は具体的な支援を考えていきたい。2回目に向け、先生方に声をかけようと思う。 ・それぞれの先生があれだけよく見て、いろいろ思うところがあるのだから、場を提供し、すりあわせさえできれば具体的な支援にいけると思う。まずは学年主任と担任を巻き込み、保護者へのアプローチを試みたい。</p>

## ② ケース会議Ⅱへの支援

### ア ケースⅡの概要

<p>対象生徒 D</p> <p>3年生。就職試験の指導を通して、担任が支援が必要な生徒なのではと気付いた。質問に対する反応が遅く、答えられないこともある。おとなしくまじめで、座学では特に問題がないため、今まで名前が挙がらなかった。就職が内定したが、本人が「自分はきちんと勤まるのか心配」と訴えてきた。家庭では問題なく、母親は友人関係で悩んでいると思っている。</p>
--

### イ 開催までの計画

B 高等学校におけるケース会議Ⅱの開催までの支援について、概要を表2に示す。

表2 ケース会議Ⅱ開催までの実践の経過(一部)

	特別支援学校コーディネーターの支援、伝えたこと	※◇は特別支援学校コーディネーターの見解を示す 高等学校コーディネーターの発言、様子
実りあるケース会議に向けた計画立案	◇ケース会議の計画を立てる予定だったが、担任から予想外の要望が挙がり、コーディネーター自身も混乱しているように感じたため、ステップ2へ戻り、質問をしながら問題を整理し、教職員で情報を共有することや高等学校コーディネーターが担任や校内の関係者と話を深めていくことに気付けるようにした(ステップ2-支援⑥)	・担任の考えと保護者の考えがうまくすり合わず、担任から、特別支援学校コーディネーターが保護者へ話をしてほしいという希望が出た。 ◇困ったような表情で、語尾があいまいになっていた。こちらへ指示してもらえることを求める感じであった。
	↓	
	・担任の先生は、特別支援学校コーディネーターが説明することで何をねらっているのだろうか？先生方はDを何とかしたいって思っているんですね。発達障害があるかもってお母さんに分かっただけじゃないですか？どうして急に特別支援学校が出てきちゃったのかな？	・それは聞いてみないと・・・(少し間が開いて)分からないと思う。こういう事例も、就職が決まってから就労支援することも今までなかったんだと思うし・・・分からないから、特別支援の専門の先生にお願いしますとなるのかも。支援の仕方さえ分かればきちんとやってくれる先生だし、Dを何とかしたいっていう思いもある。
	↓	
◇思考していく中で、担任の思いやよさに目が向けられた。「みんなで支援を考えたい」というコーディネーターの夢を思い出すことが有効と考えた。		
↓		
・ここでいろいろ決めてしまえば早いと思うけれど、他の先生方は何も知らないままで終わっちゃうよね。	<p>担任の先生にもう一度聞いてみます。 校長や教頭にも情報を入れておきます。校長・教頭からも進路に呼びかけてもらえるといいな。 学年主任からも進路や学年職員に呼びかけてもらおうと思います。</p> <p>うん、大丈夫、整理できました！</p>	
↓		
◇問題が整理でき、冷静になれた。連絡調整をする人や連携する人に気付くことができた。【ステップ3】 ・Bについて、担任や関係する先生方が困っている点や		

<p>こうなっしてほしいと思う姿と一緒に確認した（ステップ3-（2）計画-③）</p> <p>◇関係する職員と話し、連絡調整もできたため、方向性がきちんと見えているようであった。</p> <p>↓</p> <p>・ケース会議を開催するに当たり、進め方など分からないことや困っていることがないか尋ねた。（ステップ3-（2）計画-②）</p> <p>◇担任や学年主任の考えが理解できたことで、方向性が見えてきているようであった。進め方やケース会議の記録方法などは、前回スムーズにできたことでもあり、自信をもっているようである。</p>	<p>◇語尾がはっきりとし、表情も晴れやかであった。</p> <p>・担任は特別支援ではなく、就労支援の方向でいった方がよいのではと言っている。就職も決まったし、今から発達障害などを出しても保護者も受け入れられないのではないか。</p> <p>・学年主任と話し、学年会で話し合っ、先生方に実情を知ってもらったり、意見を出してもらったりして、ハローワークにつないでいければと思う。</p> <p>・学年の先生は情報交換もできてるし、分かってくれる先生ばかり。</p> <p>◇表情は明るく、はっきりと発言をしている。</p> <p style="text-align: center;"><b>うん、大丈夫！</b></p> <p>◇語尾がはっきりとし、落ち着いたイントネーションであった。</p>
<p>考察 担任からの予想外の発言に戸惑っていたが、質問をしながら問題を整理し、高等学校コーディネーターの思考を整理する手助けができた。教職員で情報を共有することや高等学校コーディネーターが担任や校内の関係者と話を深めていく必要性に気付くことができた。自ら気付き、考え、関係する教職員と話をしたことで、担任や学年職員の考えを知ることができ、ケース会議の見通しが立てられたようである。特別支援学校コーディネーターにお任せになってしまうところであったが、「支援ステップ表」を指標として計画の前の段階（ステップ2）に戻って支援したことで、高等学校主体のケース会議を計画できた。2回目の実施ということもあり、高等学校コーディネーターに自信が感じられた。</p>	

### ウ 開催と実施後

ケース会議の実施について質問や要請の連絡はなく、前回のケース会議の様子から特別支援学校コーディネーターが入らなくても実施できると考え、こちらから連絡はせず、静観した。（ステップ3-（2）実行-②）

後日訪問し、一人でケース会議が終えられたことを賞賛した。ケース会議の様子や終えてみての職員の様子を聞き取り、次の課題を引き出した。（ステップ3-（2）評価-①）

<p><b>【実施後の訪問より】</b></p> <p>○ <b>高等学校コーディネーターの評価と気付き</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学年の中で情報交換されているので、本人の様子が分かっているため支援方法のアイデアが次々出た。</li> <li>・このまま就労させてしまうのは心配という共通した意見が出た。進路指導部の就職担当の先生が参加してくれ、内定先に対する支援を担当してくれることになった。</li> <li>・「特別支援教育って何？」といった抵抗感はなくなったようである。</li> <li>・今後、どこまで支援できるかが課題。支援の進み具合を見て次回を実施していく。</li> <li>・どの学年も情報交換がされると、ケース会議も形式張らずにできると思う。最初は形を作っていかなければならない。なかなかみんな時間を作れないから、「時間を作り腰をあげるのがコーディネーターの役目」なのかなと思った。</li> </ul>
--

### (5) 実践のまとめと考察②

高等学校コーディネーターの「みんなで支援していきたい」という願いを大切にしながら、教職員が支援の必要性に気付けるようになるにはどうすればよいかという視点から質問をし、思考を深めていったことで、高等学校コーディネーターから「ケース会議の開催」という答えを引き出すことができた。意見や考えが一番出やすい場を質問し、学年会を中心とする機能的で現実的なメンバーを選択することができた。教職員の立場に立って考えていったことで、周囲にアプローチをし、ケース会議の意味や参加の仕方について理解してもらう必要性に気付くことができた。計画の段階で、学年の教職員の思いや願いはどんなものか質問し、丁寧に確認していったことで、一人一人のもっているよさや役割に気付き、アプローチをしながら協力者を増やしていくことができた。高等学校コーディネーターの不安を軽減するため、ケース会議Ⅰには特別支援学校コーディネーターが同席したが、高等学校側が主体になるよう黒子に徹するようにした。終了後すぐによかった点をフィードバックしたことで、高等学校コーディネーターの成功感や気付きを明確にすることができ、自信につながった。ケース会議Ⅱでは、計画→実行→評価のサイクルを繰り返したことで、特別支援学校コーディネーターの支援の量が大幅に減り、高等学校コーディネーターの自立を促すことができた。このサイクルが繰り返され、定着していくことで、高等学校が自治的に支援に取り組めるようになっていくと考える。ケース会議を通して、高等学校コーディネーターから「場を提供し、（教職員の意識の）すりあわせさえできれば具体的な支援にいけると思う。」「時間を作り腰をあげるのがコーディネーターの役目なのかなと思った。」という言葉を引き出すことができた。これらは、高等学校コーディネーターが、教職員の生徒に対する気付きの力や思いの強さ、支援力を引き出せたことを実感できたとともに、校内のファシリテーターとしての役割意識を高めることができたこととらえる。